



あさってあさがお  
**明後日朝顔プロジェクトの  
 これからの展開と課題  
 についての考察**

アーティスト 日比野 克彦



### これまでの経緯

2003年に新潟で行われた「大地の芸術祭・妻有アートトリエンナーレ」に於いて、廃校になった木造二階建ての校舎を利用して、地元の住民と学生スタッフが共同して行える活動として、朝顔を校舎の屋根まで伸ばそうという活動が始まる。芸術祭の会期が終了した後も、朝顔の種の収穫を村の年中行事である収穫祭の時に重ねて行うなど、一年を通して集落との交流が続く。種が収穫できたのをきっかけに翌年も育てようという考えが自然におこってくる。この時これは終わらないプロジェクトになると覚悟する。

2005年に水戸芸術館にて「日比野克彦の一人

万博」・個展を開催する。芸術館の外壁に新潟の朝顔を持ってくる。新潟の集落の人が苗を持って水戸にやってきて、水戸の人と一緒に苗植えを行う。種が人を連れてくる最初のアクションであった。

2006年には、岐阜（岐阜県立美術館）・福岡（太宰府天満宮）にも朝顔が展開し、人と人、地域と地域を繋ぐ。

2007年に金沢21世紀美術館にて「日比野克彦アートプロジェクト・ホーム→アンド←アウェー方式」というタイトルをつけ、明後日朝顔プロジェクトの活動の機能が明確化される。この年には18の地域で明後日朝顔が展開された。

2009年には金沢大学附属図書館で明後日朝顔プロジェクトが始まった。

## 明後日朝顔の定義

2003年から始まった朝顔の種が引き継がれていること、つまり種に過去のこれまでの生育地のプロフィールがついている。

## 明後日朝顔プロジェクトの定義

継続性のある地域で明後日朝顔を育成し、明後日朝顔の理念を伝える姿勢をもっている人々の活動。

### □明後日朝顔の理念

種は、まだ見ぬ先へ想いを馳せている。  
種は、時を越える事の出来る乗り物である。  
種は、見知らぬ土地に行く事が出来る船である。  
一粒の種の中には今までの無数の記憶が蓄積されている。  
一粒の種の中には次に伝えるたくさんの思い出が詰まっている。  
記憶と思い出が今日を過ごして花を咲かせると、明日の種が生まれてくる。  
種の船に乗れば明日の明日へと繋がっていく。  
そして・・・明後日の姿へと想いは広がる。

明後日朝顔プロジェクトは今年で7年目を迎えた。この7年間の中での私のアートに対する考え方は朝顔と共に随分と広がった、と同時に現代のアートの役割をより明確にすることが出来た年月であった。アートが美術館だけに納まらず、日常生活の中に機能するように、というのは私が80年代に美術の活動を始めた時からの目指すところであった。現代美術でデュシャンが便器を「泉」というタイトルを付けて展覧会に出品した出来事があり、アンディー・ウォーホールがキャンベルスープをモチーフにした作品を発表し、ヨーゼフ・ボイスが緑の党を設立

し社会運動を展開したり、既存の価値観を変化させるところにこそ美の魅力があると考えていた。

しかし私が1983年に段ボールを素材とした作品を発表した時は、決して意図的に世間の価値観の変化を求めたのではない。と同じく明後日朝顔に関しても2003年に始めて朝顔の苗を植えた時も同様である。

日常の中に美術を機能させるという視点と既存の価値観を変化させるというこの2つの視点はいつも自分の中には並行して存在し続けていた。それは実は並行するものではなく、連鎖的に回転する関係にある。美とは価値観が変容する力のことを言う。つまり「既存という日常を見直すことによって価値が変化し、その価値観が日々の生活の中で機能するということ」。

これからの明後日朝顔には、この明後日朝顔の理念の持っている価値観がどう社会に機能していくのかということを思考し、形にすることが課題となる。つまり朝顔の育成以外の活動にも明後日朝顔の理念を展開していくということになるであろう。

種は運びやすく、時間を待つことが出来る。だから時間を空間を超えて「広がること」は種にできる。

「伝えること」それが明後日朝顔プロジェクトが行うことである。

### 日比野 克彦（アーティスト）

#### HIBINO KATSUHIKO

1958年岐阜市生まれ。東京芸術大学大学院修了。

大学在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催する他、パブリックアート・舞台美術など、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多く行っている。